

資本主義的再生産の前提の問題について

高木, 幸二郎

<https://doi.org/10.15017/4362510>

出版情報：経済學研究. 26 (5/6), pp.121-145, 1962-04-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



資本主義的再生産の

前提の問題について

高木幸二郎

は し が き

私はさきに拙稿「マルクスの拡大再生産表式の説明にかんする一問題点について」〔『経済学研究』第二十三卷第三、四合併号所載〕で『資本論』第二卷第三篇での拡大再生産表式の説明にかんし、二様の解釈がありうることを解説した。そしてそのいずれにも多少の難点があることを指摘したが、それになりたいする解決試論ともいふべきものを別稿「拡大再生産表式にかんする一試論」〔同前、第二十七卷第二号所載〕で行なった。この試論での一つの結論は、再生産表式について従来の説明であまり明確にされていなかったこととして、年生産の出発点における前提に何をおくかという問題があることを指摘し、その如何によって、再生産表式の説明の仕方にも異なった結果が出てくることを明かにしたことであった。この点では第二卷第三篇でのマルクス自身の説明は、単純再生産にまで溯っても必ずしも明示的には説明が行なわれていないのである。これはマルクス自身において、年生産物を採上げながら、必ずしも年生産の期間的見地からの發展

過程の推移にとくに有意識的な分析の主眼点をおいていなかった結果と思われる。ところで右の別稿では年生産の出発点における前提の区別として、生産手段と貨幣がおかれているばあいと、生産手段と少なくとも労働者用消費手段と（そして貨幣）とおかれているばあいを問題とした。すなわち前者の場合には拡大再生産の進行条件として、蓄積ファンドは追加生産手段と追加貨幣のみで足りるが、後者のばあいには、蓄積ファンドは追加生産手段と追加消費手段（そして追加貨幣）とになることを指示した。この区別は表式の問題としては、その説明方法上の便宜の問題にとどまりうるが、より根本的に資本主義的再生産の歴史的前提にかかわる問題との関連では、かなり重要な理論的な観点（また歴史分析の方法視角）の区別にまで溯及しはしまいかと予想されるものを含んでいる。すなわち資本主義的生産の歴史的な出発をなす本源的蓄積の過程で、生産手段の資本の手への集積と自由な労働力の創出という問題だけでなく、消費手段とそして貨幣の集積の問題には、どのような地位があたえられるべきかということが派生的に考慮されてくるように思われるからである。ただ私自身はまだこのような問題意識がなおどの程度有意義なものであるかということ自体に充分の自信をもつにいたっていないし、さしあたってそのことを検討してみる準備と余裕もないので、とりあえずマルクス自身が『資本論』のなかで、上記に関連的な敘述の個所でのどのような文字を残しているかということから見てみたいと思う。

一

周知のとおり『資本論』第一巻第二篇第四章でマルクスは、貨幣の資本への転化を決定的に規定する契機である労働力の売買について説明している。すなわちそこで彼は、「貨幣所有者が労働力を商品として市場に見出す」ための「各種の

条件」を論じているのであるが、まず第一の条件として、労働力の所有者が「その労働能力の、彼の一身の自由な所有者でなければならない」ことをあげたのち、つづいて第二の条件について次のように述べている。

「貨幣所有者が、労働力を市場に商品として見出すための第二の本質的な条件はこうだ、すなわち、その所有者は、自分の労働の対象化されている商品を売ることが出来る代りに、むしろ彼の生ける肉体の中にのみ存しうる彼の労働力自身を、商品として売りに出さなければならないということである。

何人かがその労働力から区別される商品を売るためには、彼は勿論生産手段を、たとえば、原料、労働要具等々をもっていないければならぬ。彼は皮革なしでは深靴をつくることが出来ない。彼はその外に生活手段を必要とする。何人も、かの未来音楽家すらも、未来の生産物を食つて生きることが出来ない。したがって、その生産がまだ完了していない使用価値で生きることが出来ない。人間は、地上の舞台に初めて登場した第一日目におけると同様に、彼が生産する前にも、生産しつつあるあいだにも、毎日消費しなければならぬ。生産物が商品として生産されるとすれば、それらのものは、生産されたら売られなければならぬ。そして生産者の欲望を、売却の後にはじめて充足せしめることが出来る。生産期間には、売りのために必要な期間が加わる。

貨幣の資本への転化のために、かくて、貨幣所有者は、自由なる労働者を商品市場に見出さなければならぬ。二重の意味で自由である。すなわち、彼は自由な人格として、自分の労働力を商品として処置し得るということ、彼は他方において、売らば他の商品をもっていないということ、すなわち、彼の労働力の現実化のために必要なる一切の物財から、放免され、自由であるということである」。

これは労働力の売買ということの成立するための決定的条件であるが、その説明に関連してそこで一般に労働をおこない、生産を営む者が、生産手段とともに生活手段すなわち消費手段をあらかじめ供給されていなければならぬことを述べていることに注目しておかなければならない。マルクスはここで、そのような生産手段はもちろん、生活手段からも引離されている自由な労働者の存在を指摘しているのであるが、つづいてただちにこの条件が歴史過程の所産であることを確言している。

「自然は、一方において貨幣所有者と商品所有者とを生産するわけではなく、また他方において自分の労働力の単純な所有者を生産するわけでもない。この間係は決して自然史的のものでなく、またすべての歴史時代に共通なる社会的関係でもない。それは明瞭に、先行の歴史的発展の結果であり、多くの経済的変革、すなわち、永い系列をなす社会的生産の古い諸形式消滅の産物ですらある。」⁽⁴⁾

「資本の歴史的な存立条件は、決して商品流通や貨幣流通があれば、いつもあるものではない。資本は生産手段及び生活手段の所有者が、自由なる労働者を、彼の労働力の売手として市場に見出す所においてのみ成立する。そしてこの一⁽⁵⁾の歴史的條件は、一の世界史を包括する。したがって、資本は初めから、社会的生産過程のある時代を告知するのである。」

すなわち特有の歴史的関係である資本関係の出発点で、一方の自由な労働者に対立する他方の資本家は、貨幣所有者であるとともに、生産手段と消費手段との商品の所有者であることがここでは確言されているわけである。

次に同じく『資本論』第一巻の第七篇「資本の蓄積過程」を見てみよう。第二十一章「単純再生産」の冒頭でマルクス

は一般的再生産の諸条件ということに触れ、まず生産手段のことを次のように述べている。

「生産の諸条件は同時に再生産の諸条件である。いかなる社会も、その生産物の一部分を絶えず生産手段または新生産の諸要素に再転化することなくしては、絶えず生産することはできない。他の事情が変わらないならば、社会がその富を同じ規模で再生産または維持し得るのは、たとえば一年間に消費された生産手段、すなわち労働手段、原料及び補助材料を、年生産物量から分離されて新たに生産過程に合体される同量の新品をもって現物で補填することによるほかはない。したがって年生産物中の一定量は生産用に属する。それは初めから生産的消費に向けられていて、大部分は、おのずから個人的消費に適しない現物形態において存在する」。

このように再生産の一般的条件が生産手段にかんして述べられたのち、生産が資本主義的形態をとるなら、再生産もそうであることをいって、再生産は資本主義的形態においては資本の再生産の手段となることを指摘する。この資本の再生産の形態は、投下資本価値の貨幣形態での出発にその表現形態を見出しており、労働力の売買による賃金形態の成立がそこに始まるのであるが、この賃金支払の形態によって労働者は資本家からその消費基本を前貸の形で分与されるように見える幻想も、一般的な再生産の見地からみたその社会的意義における実相が闡明されていなければならないことが、次のようにして指摘される。

「労働賃金の形態で絶えず労働者の手に還流するものは、労働者自身によって絶えず再生産される生産物の一部分である。資本家はもちろん貨幣で彼に商品価値を支払う。この貨幣は、労働生産物の、或いはむしろ労働生産物の一部分の、転化形態に過ぎない。労働者が生産手段の一部分を生産物に転化しているあいだに、彼の以前の生産物の一部分が貨幣に再転化される。今日また今後半年間の彼の労働は、先週または過去半年間の彼の労働をもって支払われるのであ

る。貨幣形態が産み出す幻想は、個々の資本家と個々の労働者との代りに資本家階級と労働者階級とに着目するならば、たちまち消滅する。資本家階級は労働者階級に、後者によって生産され前者によって取得される生産物の一部分を受取るべき手形を、絶えず貨幣形態で与える。この手形を労働者は同様に絶えず資本家階級に返還し、かくして彼自身の生産物のうちの彼自身に属する部分を資本家階級から取去る。生産物の商品形態と商品の貨幣形態とがこの取引を仮装させるのである。」

「かようにして、可変資本は、労働者が自己の維持及び再生産に必要とする、そしていかなる社会的生産体制においても常に自ら生産し再生産せねばならない生活手段基本フオンまたは労働基本フオンの、一つの特殊な歴史的現象形態に過ぎない。」

(1) 『資本論』第一巻、岩波文庫版、(二)四六ページ。

(2) 同右、(二)四七ページ。

(3) 同右、(二)四八―四九ページ。

(4) 同右、(二)五〇ページ。

(5) 同右、(二)五一ページ。

(6) 同右、(四)一〇ページ。

(7) 同右、(四)二一―二三ページ。再生産の見地からは、可変資本の前貸の形態は、労働者自身の生産物である労働基本が彼の労働にたいする支払手段となっていることが示されているけれども、ただこの労働基本に前貸資本形態を付与する貨幣について、生産手段にかんしてと同様な本源的蓄積を想定することはマルクスも否定していないように見える。

「我々が資本主義的生産過程をその更新の絶えざる流れにおいて考察する場合にのみ、可変資本は、資本家の自家有の基本フオンから前貸される価値であるという意味を失う。だがしかし、資本主義的生産過程は、どこかで、いつか、始まらねばならな

い。したがって、我々の従来の立場から言えば、資本家はかつていつか、他人の不払労働には依存しない何らかの本源的蓄積によって貨幣所有者となった（傍点は引用者）のであり、且つかくして労働力の買手として市場に入り得たのであるということとは、さもあるべきことである。」（岩波文庫版、四一五ページ）

二

われわれは前項で、まず資本主義的生産の根本条件である労働力の売買についてマルクスが『資本論』第一巻第四章で、そのような歴史的関係の成立は、一方に貨幣所有者、生産手段と消費手段の所有者と、他方に無所有の自由な労働者との対立が出発点をなしていることを述べているのを見た。つづいて第七篇の再生産を取扱った個所では、再生産の一般的条件として生産手段の再生産が述べられたあとに、消費手段についてはとくにそれが労働の生産物であるにかかわらず、労働にたいする支払手段の形態をとる実相が強調され、このことが可変資本としての貨幣前貸による賃金形態のもとで隠蔽されることが示されているのを見た。すなわちここでは資本主義的再生産を特徴づける資本前貸の形態は、とくに可変資本にかんして、労働ファンドの幻想的形態であることが指摘されたのであった。

ところでマルクスは先の個所につづいて、ふたたび「一方に価値または貨幣の所有者」「生産手段及び生活手段の所有者」「他方には労働力のみ所有者」が、「互に買手と売手として相対する」関係、「したがって、労働生産物と労働自体の分離、客体的労働諸条件と主体的労働力との分離が、資本主義的生産過程の事実にあたえられた基礎であり、出発点」であることを確認したのち、再生産の進行とともにこの関係、「基礎」そのものが結果としてあたえられるようになることを周知の文章で述べているのである。

「しかるに、初めには単に出発点に過ぎなかつたものが、過程の単なる継続、即ち単純再生産を介して、資本主義的再生産の固有の結果として絶えず新たに生産され、永久化される。一方では生産過程が絶えず素材的富を資本に、資本家のための価値増殖手段および享樂手段に、転化する。他方ではこの過程からは絶えず労働者が、そこに入ったまゝの姿で出てくる——富の人的源泉ではあるが、この富を自己のために実現すべきあらゆる手段を奪われている労働者が。彼が過程に入る前に彼自身の労働は彼自身から疎外され、資本家に領有され、資本家に合体化されているので、それは過程の続行中絶えず他人の生産物に対象化される。生産過程は、同時に資本家による労働力の消費過程であるから、労働者の生産物は、絶えず商品に転化されるのみではなく、資本に、即ち価値創造力から吸い取る価値に、人身を買い取る生活手段（傍点は引用者）に、生産者を使用する生産手段に転化される。したがって、労働者自身は絶えず客体的な富を資本として、彼にとって外的な、彼を支配し搾取する力として、生産し、また資本家も同様に絶えず労働力を主体的な、それ自身の対象化手段及び実現手段から分離された、抽象的な、労働者の単なる肉身のうちに存在する富の源泉として、簡単にいえば労働者を賃金労働者として、生産する。この労働者の不断の再生産または永遠化が資本主義生産の不可欠の条件なのである。」²⁾

右の文中とくに、「労働者の生産物」が「生産者を使用する生産手段」とならんで、「人身を買い取る生活手段」に転化されると述べられている点が、重要である。すなわち消費手段生産物は、社会的に見た資本の再生産の見地からは、労働力にたいし購買手段となっている点の指摘を注目しておく必要があるのである。

資本主義的再生産は賃金労働者の再生産であるということから、マルクスはなおつづけて労働者の消費の意義の再生産の見地からする転回を敷衍して説明している。

「労働者の行う消費は二様である。生産そのものにおいては、彼はその労働によって生産手段を消費し、これを前貸資本の価値よりも高い価値をもつ生産物に転化する。これは彼の生産的消費である。同時にそれは、彼の労働力を買った資本家による彼の労働力の消費でもある。他面では、労働者は労働力の購買のために支払われた貨幣を、生活手段に用いる。これは彼の個人的消費である。したがって、労働者の生産的消費と個人的消費とは全く異なるものである。第一の消費においては、彼は資本の動力として行動し、資本家に属する。第二の消費においては彼は自分自身に属し、生産過程の外部で生活機能を行う。一方の結果は資本家の生活であり、他方の結果は労働者自身の生活である。」³⁾

しかし再生産の見地からは、この関係は転回して現われる。

「個々の資本家及び個々の労働者ではなく、資本家階級及び労働者階級を考察し、商品の個々の生産過程ではなく、資本主義的生産過程をその流れとその社会的範囲とにおいて考察するならば、事態は趣きを異にする。——資本家が彼の資本の一部分を労働力に転化するとき、彼はそれによって彼の総資本を増殖する。彼は一石二鳥をうつ。彼は彼が労働者から受取るものから利得するのみではなく、彼が労働者に与えるものからも利得する。労働力と交換して手放された資本は、生活手段に転化され、この生活手段の消費は、現存の労働者の筋肉、神経、骨、脳髓を再生産し、新たな労働者を産むに役立つ。したがって、絶対的に必要なものの限界内では、労働者階級の個人的消費は、資本によって労働力と引換えに譲渡された生活手段の、資本によって新たに搾取され得る労働力への再転化である。それは、資本家にとって最も不可欠の生産手段なる労働者そのものの生産及び再生産である。したがって、労働者の個人的消費は、それが行われるのが作業場、工場等の内部であるか外部であるかを問わず、いずれにしても資本の生産及び再生産の一要因であって、このことは、機械の掃除が、労働過程に行われるかその一定の休止時間に行われるかを問わず、かかるとして最も不可欠の生産手段であるのと全く同じである。」⁴⁾

「かくして社会的立場から見れば、直接的労働過程の外部でも労働者階級は、死んだ労働用具と同様に資本の附屬物である。」⁽³⁾

労働者の生産物のうちの消費手段と、労働者によるその個人的消費が、資本主義的再生産においてもつ意義はこのようなものである。

- (1) 『資本論』第一卷、岩波文庫版、(四)一七七ページ。
- (2) 同右、(四)一七一―一八八ページ。
- (3) 同右、(四)一九九ページ。
- (4) 同右、(四)二〇ページ。
- (5) 同右、(四)二二ページ。

三

以上は資本主義的再生産の基本規定にかんする問題であるが、なおここでは単純再生産に関連して一般的規定が述べられているにすぎない。そこでわれわれは次になお、「剰余価値の資本への再転化」「資本の蓄積」⁽⁴⁾に関連して起ってくる特殊の問題を見ることにしよう。

われわれの現在の課題に直接関係のある蓄積過程の基本問題は、『資本論』第一卷では第二十二章「剰余価値の資本への転化」での次の敘述に要約的にあたえられている。

「資本価値は最初は貨幣形態で前貸された。これに反して剰余価値は初めから総生産物の一定部分の価値として存

在する。総生産物が売られ、貨幣に転化されれば、資本価値はふたたびその最初の形態を獲得するが、しかし剰余価値はその最初の存在様式を変える。しかしこの瞬間からは、資本価値も剰余価値ともに貨幣額であって、それらの資本への再転化はまったく同じ仕方で行われる。資本家はそのいづれをも商品の購入に支出し、これらの商品は、彼が新たに彼の製品の製造を、しかも今度は拡大された規模で開始することを可能にする。しかしこれらの商品を買うためには、彼はそれらが市場にあるのを見出さねばならない。

彼自身の燃米が流通するのは、彼がその年生産物を市場に出すからであって、それは他のすべての資本家達が、彼らの商品をもって行うところと同じである。しかしこれらの商品は、市場にくる前にすでに年生産基本のうち存在していたのである。すなわち、個別資本の総額または社会的総資本が、その年のあいだに転化されるところの、そして各個別資本家はその一可除部分を保有しているに過ぎないところの、あらゆる種類の対象の総量のうちに存在していたのである。市場での出来事は、年生産の個々の構成部分の遣り取りを実現するに過ぎず、それらを一方の手から他方の手に移しはするが、総年生産を増大することも、生産された対象の性質を変ずることもできない。したがって、年々の総生産物がいかに使用され得るかは、それ自身の構成に依存するのであり、決して流通に依存するのではない。

まず第一に年生産は、一年間に消費される資本の物的構成部分がそれによって補填されるべき、あらゆる対象(使用価値)を供給せねばならない。これを控除して残るものが、剰余価値の含まれている純生産物または剰余生産物である。しからばこの剰余生産物は何から成っているか?資本家階級の欲望及び慾情の充足に向けられた物、したがって彼らの消費基本^{フオン}に入る物でもあろうか?それが全部だとすれば、剰余価値は残らず使い果たされ、そしてただ単純再生産が行われるに過ぎないであろう。

蓄積するためには、剰余生産物の一部分を資本に転化せねばならない。しかし、奇蹟でも現われない限りは、資本に転化され得るものは、労働過程で使用され得る物すなわち生産手段と、そのほかには、労働者がそれによって生活し得る物すなわち生活手段とのみである。したがって、年間剰余労働の一部分は、前貸資本の補填に必要だった定量以上に超過した追加的生産手段及び生活手段の生産に充たされたのでなければならぬ。一言でいえば、剰余価値は、剰余生産物——その価値が剰余価値である——が、すでに新たな資本の物的構成部分を含むがゆえにのみ、資本に転化されるのである。⁽²⁾」

単純再生産と拡大再生産を通じて、再生産の進行の条件は流通それ自体のうちにはなく、年生産物の物的構成にかかっていることを、右の文章は語っている。すなわち年生産は一年間に消費される資本構成部分たる不変資本、すなわち生産手段と、そして可変資本の転化形態たる労働力の維持補填のための素材、すなわち消費手段とを供給する。そしてさらにその残余である剰余生産物が全部資本家階級の消費に帰するなら単純再生産であるが、蓄積が行なわれるためには、この剰余生産物の一部が追加生産手段と追加労働者のための追加的消費手段とより成るような生産編成にならなければならぬとされる。これはいうまでもなく、後に『資本論』第二巻第三篇で再生産表式分析の課題として採上げられている問題への予示であって、拡大再生産の問題としてもここですでにその円滑な進行条件の問題の解決への暗示すら含まれていると思われるが、ただすでに見た再生産の一方の極での前提をなす、生産手段と消費手段の資本家による所有とならば貨幣所有の問題は、とくに蓄積のばあいにとどのような問題を提起するかについてはまだ述べられていないのである。そこで次に再生産における貨幣の問題であるが、これは比較的系統的な形では、『資本論』第二巻第二篇「資本の回転」の末尾の第十七章「剰余価値の流通」に述べられている。マルクスがここでこの問題をどのような形で提示し、ま

た解決しているかをなお順次見ていくことにしよう。ここでは展開は右に見た『資本論』第一巻での蓄積の敘述に直接に連接する形であたえられる。

「吾々は第一冊第二十二章で次のことを見た。蓄積、すなわち剰余価値の資本への転化は、その現実的内実から見れば、拡大された規模における再生産過程であって、この拡大が外延的に古い工場への新たな工場の追加という形で現われるにせよ、或いは従来の経営規模の内包的拡張として現われるにせよ、そうである。」⁽³⁾

「かくして、現実の蓄積、すなわち生産資本への剰余価値の転化（及びそれに対応する拡大された規模における再生産）と並んで、貨幣蓄積が行われる、すなわち、後にある程度の大きさに達してから初めて追加的能動資本として機能すべき潜在的貨幣資本としての、剰余価値の一部の堆積が行われる。」⁽⁴⁾

「この追加的潜在的貨幣資本がそれをもって表示されるところの、最も単純な形態は、退蔵貨幣の形態である。この退蔵貨幣が、直接または間接に貴金属生産諸国との交易において得られた追加的の金または銀であるということは、あり得ることである。そして、ただこの仕方においてのみ、一国内の退蔵貨幣は絶対的に増大する。他面では、この退蔵貨幣は、国内の流通から引上げられた貨幣が個々の資本家の手中で退蔵貨幣の形態をとったものにほかならない、ということもあり得る——そして多くの場合そうである。更に、この潜在的貨幣資本が単に価値標章であるか——吾々はこのここではまだ信用貨幣を問題外とする——、または第三者に対して資本家の有する法定文書に確認された単なる請求権（権利名義）であるということも、あり得る。これらの場合のすべてにおいて、この追加貨幣資本の存在形態の如何を問わず、それが将来の資本である限り、それは、社会の将来の追加的年生産に対する資本家の追加的な、且つ準備として保有される権利名義以外の何ものを表わすものでもない。」⁽⁵⁾

蓄積にあたって、期間の長短をとわずひとまず形成される追加的潜在的貨幣資本の形態は、右に見たように信用貨幣を度外視すれば、蓄蔵貨幣か、価値章標ないし請求権証書かであるが、すぐ後にも述べられているように、問題を基本的な姿で考究する今の段階では、蓄蔵貨幣が再生産論的研究の直接の課題となる。その蓄蔵貨幣は金生産国との交易によって得られる追加的金か、それであれば国内流通から引揚げられた退蔵かの何れかであることが述べられている。だが第十七章の序説的部分ではこの問題についてはこれだけの指摘にとどまり、いっそうの展開は次の第一節「単純再生産」と第二節「蓄積と拡大再生産」に移譲されている。

- (1) 『資本論』第一卷、岩波文庫版、(四)三二二ページ。
- (2) 同右、(四)三三―三五ページ。
- (3) 『資本論』第二卷、同右、(六)二六三ページ。
- (4) 同右、(六)二六四ページ。
- (5) 同右、(六)二六五ページ。

四

再生産における貨幣の問題をその基本的な姿で把握するために、マルクスはふたたび単純再生産の範囲での考察に戻っている。

「単純再生産を想定する場合にも、剰余価値の一部は絶えず貨幣として、そして生産物としてではなく、存在せねばならない。そうでなければ、剰余価値は消費のために貨幣から生産物に転化されることができないからである。こ

の、はじめの商品形態から貨幣への、剰余価値の転化が、ここでは更に進んで考察されねばならない。事柄を簡単にするために、問題の最も単純な形態が想定される、すなわち、もっぱら金属貨幣のみが、現実の等価である貨幣のみが、流通するものと想定される。」¹⁾

このように問題を単純化して示すために、ここで金属貨幣流通が想定されている。そしてこの金属貨幣流通の下で金生産の必然性が次のように説明されている。

「単純商品流通について展開された諸法則（第一冊第三章）によれば、国内に存在する金属貨幣の量は、商品が流通させるに足るものでなければならぬが、それだけではない。それは、一部は流通速度における変動から、一部は商品の価格変動から、一部は貨幣が或いは支払手段として、或いは本来の流通手段として機能する比率の差異及び変動から生ずるところの、貨幣流通の諸変動に対しても、充分でなければならぬ。現存貨幣量が退蔵貨幣と流通貨幣とに分割される比率は絶えず変動するが、しかし貨幣の量は、常に、退蔵貨幣として現存する貨幣と流通貨幣として現存する貨幣との合計に等しい。この貨幣量（貴金属量）は、次第に蓄積された社会の退蔵貨幣である。この退蔵貨幣の一部が磨損によって消耗する限り、それは、すべての他の生産物と同様に、年々新たに補填されねばならない。それは、現実には、年々の国内生産物の一部を直接または間接に金銀生産国の生産物と交換することによって、行われる。しかし、取引のこの国際的性格は、取引の単純な経過を隠蔽する。それゆえ、問題をその最も単純な最も見透ししやすい表現に戻すためには、金銀生産が国内で行われ、したがって金銀生産が各国内の社会的総生産の一部をなすものと前提されねばならない。」²⁾

「奢侈品用として生産される金銀を無視すれば、金銀の年生産の最小限度は、年々の貨幣流通によって惹起される貨幣金属の磨損分に等しくなければならない。更に、年々生産されて流通させられる商品量の価値額が増加すれば、年々

の金銀生産もまた増加せねばならない。すなわち、流通商品の増加価値額とその流通（及びそれに対応する貨幣蔵）に必要な貨幣量とが、貨幣流通の速度の増大によって、また支払手段としての貨幣の機能範囲の拡大によって、すなわち、現実の貨幣の媒介によらない買と売との相互決済の増加によって、相殺されない限り、年々の金銀生産が増加せねばならない。

かくして、社会的労働力の一部と社会的生産手段の一部とが、金銀の生産において年々支出されねばならない。」

これらの文章の意味するところはきわめて明瞭である。すなわち貨幣流通速度の増大等による機能貨幣量の効率には伸縮性があるにしても、磨滅貨幣の補填のための金生産は最少限存在しなければならず、そして流通商品額の増大のばあいに対応するためには、結局はやはり金生産も増大しなければならぬということである。この後者のばあいは拡大再生産の場合を提示しているのであるから、右の命題は一般的総括的な定言として受取って差支えない。

ところでマルクスは、右のようにして金生産の必然性を指摘し、この金生産部門について不変資本、可変資本、剰余価値のそれぞれにかんする特殊問題に言及したあと、社会の総生産物中の剰余価値と流通に必要な貨幣量とは何の関係もないことを採上げる。

「商品流通の法則に従えば、貨幣量は、流通に必要な貨幣量プラス退職貨幣形態にある貨幣量に等しくなければならず、この後の方の貨幣量は、流通の収縮または膨脹に応じて増加または減少し、また殊に、必要な支払手段予備基金の形成に役立つ。貨幣で支払われねばならないものは——諸支払の相殺が行われない限り——諸商品の価値である。この価値の一部が剰余価値から成っているということ、すなわち、商品の売手にとって何の費用も要しなかったということは、少しも事柄を変えるものでない。生産者はすべて彼らの生産手段の独立所有者であるとし、したがって、直接

生産者たち自身のあいだで流通が行われるものとしよう。彼らの資本の不変部分を考察外に置けば、この場合彼らの年々の剰余生産物は、資本主義的狀態になぞらえて見れば、二つの部分に分割され得るであろう、すなわち、単に彼らの生活必需品のみを補填する部分 a と、彼らが一部は奢侈生産物において消費し一部は生産の拡張のために充用する部分 b とに。その場合には、a は可変資本を、b は剰余価値を代表する。しかしこの区分は、彼らの総生産物の流通に必要な貨幣量の大きさには、少しも影響を及ぼさないのである。他の事情が不変であれば、流通商品量の価値は同じであろう、したがって、それに必要な貨幣量も同じであろう。また、回転期間の分割が同じであれば、彼らは同じ貨幣準備を、すなわち、彼らの資本の同じ部分を絶えず貨幣形態で、もたねばならないであろう、というのは、想定によれば、彼らの生産は依然として商品生産だからである。したがって、商品価値の一部分が剰余価値から成るといふ事情は、事業の経営に必要な貨幣の量を変化させることは全然ないのである。⁽⁴⁾

このことは再生産すなわち社会総資本の流通における貨幣量の問題にかんしてのマルクスの堅持する立場をきわめて説得的な形で表明したものである。すなわち言いかえるなら、存在貨幣量は流通手段として機能する部分と蓄蔵貨幣の部分との両者より成るが、その相互の関係、したがってまたその変動する総量は、貨幣流通速度や流通貨幣節約の機構を別とすれば流通商品の総額とその変動に依存するものであり、したがって単純商品流通の理論的規定に基づいているものであって、流通商品額の $c + v + m$ の構成、また剰余価値 m が蓄積ファンドと消費ファンドとに分たれる割合とは無関係であるということである。

ところでマルクスは右の定言のうちに、経済学上の一論争課題となった一設問——「いかにして資本家は、彼が流通に投ずるよりもヨリ多くの貨幣を、絶えず流通から引上げ得るのか？」⁽⁵⁾ という疑問は、ブルジョア経済学の立場からは剰

余価値形成が資本主義にとって必然であることから、明確な形では次のように問い替えられなければならないとしている。

「したがって問題は、剰余価値はどこから来るか？ではない。そうではなく、剰余価値を貨幣化するための貨幣はどこから来るか？である。」⁶⁾

そしてこの設問の核心点をなおいっそう平明に示すために次のような説明が付け加えられている。

「資本家が流通に投ずる商品資本は、彼が労働力及び生産手段として流通から引上げた生産資本よりも大きな価値をもっている（どうしてそうなるのかは、説明も理解もされないものであるが、ブルジョア経済学の立場からすれば一の事実なのである）。それゆえ、この前提のもとでは、資本家Aのみではなく、B、C、D、等々もまた、彼の商品との交換によって、彼が最初に前貸し且つ絶えず新たに前貸する資本の価値よりも多くの価値を、絶えず流通から引上げ得るのはなぜであるか、も明らかである。A、B、C、D等は、彼らが生産資本の形態で流通から引上げるよりもヨリ大きい商品価値を、絶えず商品資本の形態で流通に投ずる——この操作は、独立に機能する諸資本と同様に、多面的である。したがって彼らは、彼らのそれぞれの前貸生産資本の価値に等しい一価値額を、絶えず分け取りせねばならない（すなわち各自が流通から生産資本を引上げねばならない）。また、その生産要素の価値を超える商品価値のそれぞれの超過分として、彼らが同様に各方面から商品形態で流通に投ずる一価値額を、同様に絶えず分け取りせねばならない。」⁷⁾

すなわち個々の資本家でなく多数の資本家をとっても、彼らが前貸資本の価値を超える剰余価値を取得するのは、もともと商品資本の形では剰余価値を含んだものを流通に投ずるからであり、したがって流通はこのすでに存する剰余価

値の相互分配をおこなうにすぎないと説かれる。言いかえるなら、貨幣を捨象した形では、そこには不可思議な問題はなならないというのである。そしてもう一度問題は貨幣の来源にあるのだと繰返す。

「しかし商品資本は、それが生産資本に再転化される前に、またそれに含まれている剰余価値が支出される前に、貨幣化されねばならない。そのための貨幣はどこから来るのか？」⁽⁹⁾

トウクもその他の者も回答をあたえていない。「一見困難に見える」この設問は、マルクス自身のきわめて重要視したところであつたため、なおそのあとに色々の考へうる「もつともらしい遁辭」とも形容される説明方法を示して一々これを反駁している。そしてふたたび、前記の流通商品額とそれに規定される貨幣額の關係の問題が設問の根底にあるのだということを、もう一度念を、おすようにして確かめる。

「一般的解答はすでに与えられている。X×1000 磅の商品量を流通させるべき場合、この商品量の価値が剰余価値を含むか否か、この商品量が資本主義的に生産されたか否かは、この流通のために必要な貨幣額の量を少しも変えるものではない。したがって、問題自体が存在しないのである。他の諸条件、貨幣の流通速度等が与えられているならば、X×1000 磅の商品価値を流通させるためには、この価値のいかに多くが、またはいかに少くが、これらの商品の直接的生産者に帰属するかという事情とは全く無關係に、一定の貨幣額が必要である。ここに問題が存在するとすれば、それは、一國における商品の流通に必要な貨幣額はどこから来るか、という一般的な問題と一致する。」⁽⁹⁾

このようにして問題の中心点は、すでに単純商品流通のばあいにあたえられている理論的規定について、剰余価値が生産されて流通する資本主義的商品流通のばあいに惹起せられる混迷の解明にあることが示唆されてくる。

「とはいへ、資本主義的生産の立場からすれば、確かに特殊な一問題をなすかのような外観が存在する。すなわち、ここでは、貨幣が流通に投ぜられる出発点として現われるものが資本家だからである。労働者がその生活手段の支払のた

めに支出する貨幣は、あらかじめ可変資本の貨幣形態として存在し、したがって元来は労働力の購買手段または支払手段として資本家によって流通に投ぜられる。そのほかに資本家は、彼にとって元来彼の不変固定資本及び不変流動資本の貨幣形態をなすところの貨幣を、流通に投ずる。彼はそれを労働手段及び生産材料の購買手段及び支払手段として支出する。しかし、この点を超えては、資本家はもはや流通内にある貨幣量の出発点としては現われない。ところで、出発点は二つしかない、資本家と労働者と。……しかし、労働者について言えば、彼は彼によって流通に投ぜられた貨幣の第二次出発点であるに過ぎず、資本家がその第一次出発点であることは、すでに述べた。……」⁽¹⁰⁾

「かくして資本家階級は依然として貨幣流通の唯一の出発点である。……資本家階級は、常に五百磅しか流通に投じないのに、いかにして常に六百磅を流通から引出し得るのか？無からは何も生じない。資本家の全階級は、前もって流通に投ぜられていないものを流通から引出すことはできない。」⁽¹¹⁾

このようにして、ついに、マルクスはこの問題にたいする彼の解答をあたえる。

「実際には、一見いかにも逆説的に見えるが、資本家階級自身が、諸商品に含まれている剰余価値の実現に役立つ貨幣を流通に投ずるのである。しかし注意せよ。資本家階級はそれを前貸貨幣として投ずるのではない、すなわち資本として投ずるのではない。資本家階級はそれを自己の個人的消費のための購買手段として支出する。したがって、資本家階級がその流通の出発点であるとはいえ、それは資本家階級によって前貸されるのではない。」⁽¹²⁾

先の設問にたいする解答はこれによってあたえられている。すなわち資本家が流通に投ずるのは、商品資本の形では右のように五百ポンドではなく、すでに剰余価値を含む六百ポンドなのである。六百ポンドの生産物を流通に投じて等価である六百ポンドの貨幣を流通から引揚げることに何ら不思議はない。この六百ポンドのうちすでに五百ポンドは、

六百ポンドの生産物の生産のための素材の購入のため流通に投ぜられている。とすれば残りの百ポンドはどこから来るか？ 百ポンドの生産物を買う者がこれをもたらす。この場合では、すでに労働者は前貸資本五百ポンドのうちから支払われた百ポンドの貸金を、生産物百ポンドの購入に充てていることが想定されるから、剰余価値をあらわす百ポンドの生産物の購買者は資本家以外にないのである。全資本家を一体として資本家階級として見るとき、彼らは一方で商品資本である生産物を投じ、他方でこれに対応する同額の貨幣を投じている。この貨幣は右の例では五百ポンドが前貸資本としての貨幣であり、残りの百ポンドはこのばあい資本家の個人的消費のための購買手段としての貨幣なのである。

すなわち社会的総資本の再生産の前提には、生産手段と（消費手段と）労働力とだけでなく、一定額の貨幣があたえられていなければならないが、それは前貸資本の貨幣形態のためだけでなく、剰余価値の実現のためのものとしても必要であり、それは一般的にはその価値内容を問わず、一定額の商品の流通のために一定額の貨幣が必要とされることから生じてくることであって、その貨幣所有者は本源的な商品流通当事者である資本家以外にはないことである。

- (1) 『資本論』第二卷、岩波文庫版、(六)二七〇―二七一ページ。
- (2) 同右、(六)二七一ページ。
- (3) 同右、(六)二七二ページ。
- (4) 同右、(六)二七六―二七七ページ。
- (5) 同右、(六)二七七ページ。
- (6) 同右、(六)二七八ページ。
- (7) 同右、(六)二七八―二七九ページ。

- (8) 同右、(六)二七九ページ。
- (9) 同右、(六)二八三ページ。
- (10) 同右、(六)二八三―二八四ページ。
- (11) 同右、(六)二八四ページ。
- (12) 同右、(六)二八五ページ。

五

前節での再生産の前提としての資本家による貨幣所有の問題は、単純再生産の範囲で問題が提起され、解決された。拡大再生産のばあいには、この問題はどうか？ この点につきマルクスは第二巻第十七章第二節「蓄積と拡大再生産」で次のように述べている。

「拡大された規模における再生産の形態で蓄積が行われる限りでは、それが貨幣流通に関して新たな問題を提出するものでないことは明らかである。

まず第一に、増大する生産資本の機能のために必要とされる追加貨幣資本について言えば、それは、実現された剰余価値のうち、資本家が収入^{レヴェニュー}の貨幣形態としてではなく貨幣資本として流通に投ずる部分によって、供給される。貨幣はすでに資本家の手中にある。ただその用途が異なるだけである。

しかるに今や、追加生産資本によって、その生産物として、一の追加商品量が流通に投ぜられる。この追加商品量と同時に、その実現に必要な追加貨幣の一部が流通に投ぜられた。すなわち、この商品量の価値が、その生産に消費された生産資本の価値に等しい限りでは。この追加貨幣量は、まさに追加貨幣資本として前貸されたものであって、したが

って彼の資本の回転によって資本家のもとに還流する。ここで再び前と同じ問題が現われる。いま商品形態で存在する追加剰余価値を実現するための追加貨幣は、どこから来るのか？」¹⁾

すでにわれわれの知るように、剰余価値を実現するための貨幣は、資本家自身が流通に投ずるものであった。だがこれはもともと剰余価値の資本家の使途と関係なく、流通商品総額によって規定される必要貨幣量の一部として現われてくるものであった。したがって蓄積によって剰余価値の一部が個人的消費に向けられず、資本に転化される場合でも、そのための貨幣はすでに存在するのである。右の文章の前段ではそのことが指摘されている。ところが、この追加資本の機能の結果として、次の年度においては追加商品量が現われてくる。この追加商品量の価値を実現すべき貨幣はどこから来るか？ マルクスは右の引用文の後段でこの追加商品量に含まれる追加剰余価値だけを実現すべき貨幣の来源についてたずねているが、これは同じ前提のもとでは思い違いであって、追加商品量の全額に照応する貨幣額の来源が問われなければならない。それは前年度に比べてその分だけ流通商品額が増加しているのであり、したがってそれに規定された必要貨幣額の増加が生じているからである。なるほど引用文中にいわれているように、追加生産資本に等しい額だけの貨幣は、すでに前年に存在した剰余価値部分実現の貨幣額により賄われる。しかしこの貨幣額は、こんどは追加前貸資本として機能しているのであるから、これに照応する部分だけは第二年度に生産される剰余価値照応部分とは別個になり、前年の場合の剰余価値所得実現のための貨幣額からはもはや控除されている。したがってその分に相当する額も第二年度には新たに補充されなければならないのであり、けっきょく追加商品額の総額に対応する追加貨幣額が見出されねばならないのである。具体的数値例をもってすれば、前年に $4000c + 1000v + 1000m = 6000W$ の商品額の流通に $6000G$ の貨幣が必要であったばあい、剰余価値の $\frac{1}{2}$ が蓄積されて、第二年度に $4400c + 1100v + 1100m = 6600W$ となつたと

すれば、追加貨幣額の必要は $600G$ であつて $1100m - 1000m = 100m$ ではないのである。このようにこの個所では、マルクス自身に思い違いによると見られる一つの錯誤があるとはいへ、提起された設問にたいしてあたえられた解答には何ら問題はない。

「一般的解答はやはり同じである。流通商品量の価格総額が増加していることは、一定の商品量の価格が騰貴したからではなく、いま流通している商品の量が以前に流通していた商品の量よりも大きく、しかもそれが価格の下落によって相殺されるようなことがないからである。このヨリ大きな価値をもつヨリ大きな商品量の流通のために必要とされる追加貨幣は、流通貨幣量のヨリ以上の節約——諸支払の相殺等によるにせよ、同じ個貨の流通を速くする手段によるにせよ——によるか、または退蔵形態から流通形態への貨幣の転化によって、調達されねばならない。……」²⁾

「これら一切の手段を尽してなお足りなければ、金の追加生産が行われねばならない、或いは同じことに帰着するが、追加生産物の一部が直接または間接に金——貴金属生産諸国の生産物——と交換される」³⁾

さきに見た単純再生産のばあいには、われわれは資本家による貨幣金の所有とその放出が、資本前貸にかぎらず所得として個人的に消費される剰余価値流通のためにも必要であることを知った。われわれはそこでは紙数の関係もあって、単純再生産のばあいにすでに存する磨減貨幣補填のために必要な金生産にかんする記述はいっさいしなかったが、この年々の金生産があればこそ究極的には、社会的資本の再生産のための必要貨幣量、したがってまた資本家の手許における保有貨幣量も補填されていることが確認されているのであった。⁴⁾ さきに第二巻第十七章の序説的部分で示唆された蓄蔵貨幣の資本主義的生産にとっての必然性は、したがって単純再生産と拡大再生産の両面から論理的な立証が行なわれている。蓄蔵貨幣の資本主義的生産のための歴史的必然性については、この第二巻第十七章では何ら詳細な記述は見当

らないが、「単純再生産」にかんする節の末尾にある次の文章は示唆の深いものであるので、ここでは最後にそれを掲げておこう。

「資本主義的生産様式——その基礎は賃金労働であり、したがって貨幣をもってする労働者への支払及び一般に現物給付の貨幣給付への転化でもある——は、流通とそれによって条件づけられた貨幣退蔵（準備基金等）とのために十分な貨幣量が国内に存する場合に、初めてヨリ大きな範囲とヨリ深い完成とをもって発展し得る。これが歴史的前提である、尤も、まず十分な退蔵貨幣量が形成されて、然る後に資本主義的生産が始まるというように解されてはならないのであるが。そうではなく、資本主義的生産は、その諸条件の発展と同時に発展するのであって、この諸条件の一つが貴金属の十分な供給なのである。それゆえに、十六世紀以来の貴金属供給の増加は、資本主義的生産の発展史における本質的な一要因をなすのである。」⁽⁵⁾

- (1) 『資本論』第二巻、岩波文庫版、(六)三〇一ページ。
- (2) 同右、(六)三〇一—三〇二ページ。
- (3) 同右、(六)三〇三ページ。
- (4) 同右、(六)二八八—二九一ページを参照せよ。
- (5) 同右、(六)三〇〇ページ。